

## 社會科學的にものを見るときか

——とくにバナーの「歴史における科學」を念頭において——

高 島 善 哉

社會科學的にものを見るときか。この問

いに對して手みじかでわかりやすい解答を與えることは不可能である。もしこれから社會科學の諸部門を勉強しようと思ふなら、その人はまずそれらの個々の諸部門を實際について研究してみるのがよい。それ以外にこの問題に對して、自分でなつとくのいく解答をえることはできないだろう。つまり經濟學や商學や法學や社會學や教育

社會科學的にものを見るときか

學や歴史學などの勉強をよそにして、社會科學というものを理解することはできない。社會科學そのものというものはどこにも存在しないのである。

この點は自然科學についても同じことがいえると思ふ。自然科學は、物理學、化學、生物學等々として研究されている。自然科學そのものというものはどこにも存在しない。だからもし私たちが、自然科學的にものを見るときかということを知りたいと思ふなら、これらの個々の自然科學の諸部門を一つ一つ丹念に研究する以外

に道はないだろう。

すべての道はローマに通ずるといふ言葉がある。これは科學の領域でもそのまま當てはまる。自然科學であろうと、社會科學であろうと、私たちはその山脈の一角に取りついて、その頂上を極めようと努めれば努めるほど、やがては全山脈を見渡すことのできるような高さによじ登ることができるようだ。あるいはまた、私たちが一つの科學の専門部門のなかで、どこまでもその鑛脈を掘り下げていけば、やがては必ずあらゆる鑛脈に共通の地下水にふれることもできるだろう。そのときはじめて、すべての道はローマに通ずるといふ言葉の意味を、自分で體驗することができるようだ。

しかしながら、初學者にとって問題はむしろその前にあるのではないかと思う。なぜ私たちは、經濟學を、商學を、法學を、社會學を、教育學を、歴史學を勉強しなければならぬのか、ということが最初に問題となる。あるいはまた、どうしたら私たちは、これらの社會諸科學の勉強に對して興味をもつことができるだろうか、このようにいい換えてもよい。

この疑問は、社會科學の門前に立つてゐる人だけでなく、すでに社會科學の殿堂のなかに入ること許された人にとつても、たえず起つてくる疑問である。經濟學とは何か、商學とは何か、法學とは何か、社會學とは何か、教育學とは何か、歴史學とは何か。何のために私たちはこのような學問を勉強しているのか。このような反省や懷疑が、研究の過程において必ず出てくるのである。

そのとき私たちは知らぬまに、個々の専門科學の領域から科學の共通の地盤の問題につき當ることになる。もし私たちが自分の研究に生きがいを感じ、同時にそれによつて人生のよろこびを見出すことができるとしたら、科學は有意義なものであるにちがいない。反對に、もし私たちが一つの科學を勉強すればするほど頭腦の疲れをおぼえるだけで、それによつて新しい生活への活力を培うことができないとすれば、私たちはいったい何のために科學を勉強しているのか。そのような疑問につき當らざるをえないだろう。

このような疑問は、もっと考えてみなければならぬいくつかの重要な問題を含んでいる。第一には、私たち

の勉強のしかたそのものが、はたして筋にかなったものであるかどうかという問題である。もし勉強のしかたが筋から離れていたとすれば、ちょうど山中にさまようようなもので、いくら歩いても目的地に近づくことはできない。しかし第二には、私たちの勉強している學問そのものに責任があることがある。その場合には、私たちの勉強のしかたが悪いのではなく、學問そのものの方法が正しくなかったのである。すべて研究には何よりもまず指導者が必要である。それは山中を旅行するのに地圖が必要であるのと同じ意味をもっている。しかし、もし地圖そのものが不正確であったり、まちがっていたりしたらどうであらうか。私たちは多くの無駄足をふむばかりではなく、ときには自分の生命さえも危険におとしめることがあるだろう。

だから實際に山登りを試みる前に、山登りとはどういうことかについて一おうの基礎知識をえておくことは必要である。地圖の正否についてあらかじめ吟味を加えておくことも必要である。さらにその前に、山登りの興味そのものを直接に感ずることがもっと必要である。この

社會科學的にもをみるといふのはどういふことか

ような興味と必要は、私たちが山登りの經驗をつみ重ねるたびごとに深まっていくものであるから、まず最初に登ってみることだという助言はたしかに眞實である。しかしその前に一おうのアイディアをもたなければならぬということも同様に眞實である。私たちは個々の科學を勉強しながら科學そのものについて反省し、このような反省を怠りなく加えながら個々の科學のなかで勉強を續けていく。この意味で、初學者が社會科學の門前で最初にいづく問題なり疑問なりは、社會科學の殿堂のなかへすでに入ること許された専門家が、その研究の進むにつれていづく疑問と同じ種類のものなのである。

## 二

なぜこのような問題を私は最初に掲げたのであろうか。そのわけは二つある。第一には、社會科學という學問そのものが、一見すこぶる疑問にみちた性格をもっているからである。第二には、さらにその上に、現代の社會科學が非常に問題の多い發展を遂げているということである。この二つの理由から、社會科學とはどういふも

4

のかという問題に對して、はじめから手みじかでわかりやすい解答を與えることは不可能となつてゐる。それは解答者の力が及ばないということよりは、むしろ現代の社會科學そのものが、簡単な、一義的な解答を許さないためである。

だから、私はまずこれらの二つの問題點について讀者の注意を喚起したいと思う。

まず第一の點から考えてみよう。社會科學は科學であるか。それを勉強して何の役に立つであらうか。こうした根本的な疑問は、今日非常に多くの人がいだいてゐる疑問である。科學といへば誰でも自然科學のことを考へるのが普通である。これは日本のことだけではない。

最近その著書が邦譯されてわが國でも非常に有名になつたバナール「歴史における科學」(J. D. Bernal, Science in History, 1954.) は、イギリスでもフランスでもアメリカでもその點は同じだと述べてゐる。バナールは世界的な自然科學者である。しかし彼の視野は自然科學の諸領域だけでなく、社會科學の各部門に及んでおり、しかも彼の見方は根本において歴史的に社會的に科學という

ものの役割をみていこうとするものである。ところがこのバナールが、社會科學の現状は、ちょうどガリレオ、ニュートン以前の自然科學の状態、つまり十七世紀の段階にあるにすぎないといつてゐる。これは私たちのいまの問題にとつて見のがすことのできない言葉であると思ふ。社會科學者は口はまめだが仕事はしない、社會科學者は資本主義世界ではまだ化學者や工學技師のようになくてならぬものではない(邦譯第四分冊五七〇頁)、と同じバナールは述べてゐる。これは現代の社會科學者にとつてききずてならぬ言葉である。

自然科學の目で社會科學をみたとき、社會科學といふものはどうも科學として信用できないものだといふ印象を與えるのは、まことにもっともである。その理由としてはいろいろあるが、第一に、社會科學では豫測が正確にできないといふことがあげられる。たとえば來年の景氣はどうなるか、十年後の日本經濟はどうなるか、そういったことは正確に豫測することはできない。憲法は改正されるのかされないのか、改正されるとすればそれはいつか、そういつたことも誰も正確に豫測することはで

きない。科學は豫見するためにあるものだともいわれる。豫言でなくて豫測が科學の生命だともいわれる。ところがもし社會科學で正確な豫測をすることができないとすれば、社會科學者は多かれ少なかれ豫言者となるほかはないのではなからうか。

この疑問に對しては私はつぎのように答へたい。社會科學が自然科學のように正確な豫測を行うことができないということは、社會科學者の研究のしかたが悪いのではなく、社會というものが自然に比べて一種特別の組立てをもっているからである。自然と社會と比べてどちらが複雑であるかといえ、もちろん社會の方が複雑である。しかしよく考えてみれば、自然の世界もまた極めて複雑であつて、簡単に社會の方が自然よりも複雑であるということとはできない。複雑であるか單純であるかというところがこの問題のきめ手ではない。それはただ程度の差異であるにすぎないのであつて、自然と人間、物質と生命の間の區別は、追求すればするほどみえなくなつてしまふというのが最近の自然科學の研究の成果なのである。

社會科學的のものをみるといふのはどういふことか

自然と社會の本質的な區別は質的なものである。社會を作るものは個々の人間である。その個々の人間が自分で作った社會という建物のなかに自分を入れるのである。だから社會科學では、個人と社會、作るものと作られるものとの關係が本質的に重要である。物質の世界ではこのようなことはない。たとえば物質は原子からできているが、原子が物質を作るといふことはない。生物の世界でも同じことがいえる。たとえば肉體は細胞からできてくるが、細胞が肉體を作るといふことはない。ところが社會は個々の人間によって作られる。それと同時に個々の人間は逆に社會によって作られていく。主體と客體といへばむづかしいが、この二つのものが統一されていくところに、社會を自然から區別するもつともたいせつなきめ手がある。社會が自然に比べて複雑であるといわれるのはこのためである。社會科學が自然科學のように正確に豫測ができないのもこのためである。

これと關連して、自然科學では實驗ができるが、社會科學では實驗ができないといふことを、二つの科學の區別の標識とする考へがある。一おうもつともである。し

かしバナールもいっているように、これは本質的な區別ではない。たとえばアメリカのT・V・Aの實驗などは立派な實驗の一例であるし、自然科学で實驗がいつもできるというわけではない。それよりもっと重要なことは、社会科学では實驗がそのまま實際の一部となるということがある。これはいま述べた主體と客體とがいつも不可分に結びついているという社會の特性からきていることであって、主體に對して客體を對立させ、その客體を主體が外側から觀察できるという非常に都合な組立てをもっている自然の世界とは、この點ではっきりした相違が現われてくるのである。このことから私たちは、社会科学のものの見方にとって極めて重要な問題に進むことができる。それは社會に對する個々人の利害關係のちがひということである。社会科学ではこれを人々の價值判断のちがひの問題として取上げている。

いまアメリカのT・V・Aのことをいいたが、この巨大な實驗一つを取上げてみても、關係者の見方や立場は決してすべてが一致することはありえない。第一にこの實驗のために自分の土地や利權を失う人ができるだろ

う。全部の損失でないとしても、その意志に反して強制的に買上げてしまう場合が少なくなかった。それは國家のため、公共の福祉のためやむをえない措置だということありきたりのきまり文句もあるが、いったい國家とは何か、公共の福祉とは何か。こういう根本の問題についてまったくちがった見解がありうるのだから、このきまり文句はいつでもこの實驗の被害者たちをなっとくさせるに足るものだということはできない。ましてこの文句の背後にあって、巨大な利益を獲得することに成功した少数の人々がいることを思い合せらるなら、何が眞實であり、どの見方が正當であるかを決定することは必ずしも容易なことではない。

もう一つ私たちの身近かな實例をとってみよう。太平洋上における水爆の實驗は、單に自然科学的な實驗ではなくて、社会科学の意義を十二分にもっているのであるが、この實驗に對する人々の見方は決して一様ではない。ある人はそれは人類の平和のために必要であるといひ、他の人は人類の平和のためにこそこのような實驗は禁止すべきだといひ。一民族の立場からこれを肯定する

ことは可能であろうが、他民族の立場からはかりそめにも肯定するわけにはいかない。またこのような原子兵器を製造することによって利益を獲得することができる人たちと、そうでない人たちとの間にも、大きな意見の対立がありうるのである。私たちは、いったい民族の立場とは何か、人類の立場とは何か、平和を欲するとはどういうことか、こういった問題について根本的に考えてみなければならぬ。しかもこういう問題を考えれば考えるほど簡単に明白な結論は容易にえられない。というのはこのような問題をめぐって意見の極端な対立が現われるというのが、社會に關する科學の世界の實狀だからである。

このようなあまりにも現實的な問題に關して意見が眞正面から對立するということは、むしろ當然である。もっと原理的で理論的な問題を引合ひに出すべきだという反對意見が起るかもしれない。しかしながら、どんなに原理的で理論的な問題を取上げてみても事情は同じである。たとえば政治學では、國家とは何か。經濟學では、資本とは何か。社會學では、階級とは何か。こういった

社會科學的のものをみるといふのはどういふことか

基本的な概念について科學者たちの意見が根本的に分れている。それだけではない。そもそも政治的權力とは何か。法的正義とは何か。經濟的福祉とは何か。社會關係とは何か。このような個々の社會科學のもっとも基本的な問題に對する解答が、研究者の立場によっていろいろちがうばかりでなく、根本的に對立する場合が多い。要するに立場のちがいがいふことがどうしても避けられない。そこから研究方法のちがいがいふことも生まれてくる。これは今日の社會科學をして、何かたよりにならぬ、簡單になっとくすることのできない科學だといふ感起させる最大の原因である。自然科學者であるパナールが、社會科學の現狀は十七世紀の自然科學の狀態だといわざるをえなかつた一つの理由がここにあるのである。

かくて私はこの節の初めに出しておいた第二の問題にふれたことになる。すなわち今日の社會科學は、まったく對立した立場や見方や方法の渦巻きのなかに投げ込まれていふことである。これは初學者を惱ませるばかりでなく、すでにいったように、社會科學の殿堂のな

かに入ること許された研究者をたえず悩ます問題である。いな、私たちが専門社會科學者として研究を積み重ね積むほど、この悩みを深くせざるをえないのである。

これは考えようによっては、自然科學に對する社會科學の科學性の缺如のまぎれもない證據だということもできるであろう。たしかにこれは、社會というものが單に物質的なアトムからできているのではなく、自ら考え、自ら行爲する一個の主體としての人間からできている必然の結果だといえる。このことについてはすでに述べた。だがしかし、社會科學が十七、八世紀のころ、イギリスやフランスで生まれたときには、このような混亂状態は存しなかった。社會科學者の立場や見方は基本的には一致していた。ところが社會科學の發展につれて、このような立場や見解の望ましい基本的な一致がしだいに失われた。そして十九世紀から二十世紀に至り、科學者の間の意見の分裂や對立が強くなるばかりで、二つの世界大戰をへた今日、その間の溝はもはや越えることのできなほど深いものになった。バナールはこのような歴史的發展の跡を、簡潔ではあるが、鋭く、才氣にみちた筆を

もって描いている。彼の社會科學的感覚は、尋常の自然科學者にはとうてい期待できないほどすぐれたものである。

分裂と對立の原因は社會そのものなかにある。近代社會の歴史的な發展の過程そのものなかにある。このようにみなければならぬ。當初には一つの基本線の上にあつたものが、どうしてこのような分裂と對立の状態にもたらされたのか。私たちはその歴史的發展の跡を見なおさなければならぬ。これが社會科學への正しいアプローチのしかたなのである。自然と社會との根本的なちがいは、その歴史的變化が比較にならぬほど烈しいということである。バナールはこういつているが、私もまたこの意見に同意したい。社會科學的なもの見方をしつかりと身につけるためには、何よりもこの點を理解することが必要である。

### 三

以上のことから、自然科學に對する社會科學の特殊構造といったものはつきり理解される。それはどういふ



ことであるかという点、社會科學には理論と歴史と政策という三つの研究部門があるが、自然科學にはそのような研究部門の區別がないということである。

自然科學も社會科學も經驗科學である以上は、實驗と觀察を重んじなければならぬ。單なる幻想や思辨ではなく、經驗の上に立って研究を進めていくという態度が根本にある。この點では二つの科學の間に原理的な區別はない。しかしながら、自然科學の研究には、歴史的な研究ということは必ずしも絶対になくてはならないものとは考えられていない。もちろん自然科學の歴史を研究するということは、自然科學の理論的研究にとって大きな手助けとなるものであり、すぐれた自然科學者は、このような歴史的な感覚をもって今日および明日の理論研究を進めることの意味を高く評價している。しかしその場合でも、社會科學者が歴史的な感覺、歴史的な視野、歴史的な研究態度を絶対に欠くことができないというような意味ではない。自然の世界にももちろん歴史的な變化がないのではない。しかしそれは社會における歴史的な變化に比べると、さし當り問題にならないほど輕微なもの

社會科學的のものをみるといふのはどういふことか

である。社會的なものはすぐれて歴史的なものである。

しかし政策的な研究という問題になると、自然科學と社會科學の差異は誰の目にも明瞭である。自然科學には政策部門は存しない。自然の改造ということは、今日の自然科學者にとってなかなか重要な課題となつてゐる。そこから技術研究の意味が急速に高まつてきてゐる。しかし技術學というものは、ごく普通に、科學の應用を研究する學であるといわれる。しかしそれは應用學であつて、本來の意味での政策學ではない。技術というものが、いかに人間の生活を向上させるために必要缺くべからざるものだとしても、それは社會科學における政策とは本質的にちがったところがある。というのは、政策というのは、人間が自分自身で自分を變えていく方式を科學的に研究することであり、さらに、この方式がどのようなものでなければならぬかということは外から與えられるものではなくて、人間自體のなかから與えられるものだからである。技術においては、目的は外から與えられる。たとえば電氣發電に役立たせるためには原子爐をどのような構造にしたらよいかということが問題となる。

これは原子エネルギー自體にとつては外から與えられた目的である。ところが原子エネルギーを平和目的に使うか戦争目的に使うかということは、私たち人間社會のあり方に關する問題である。どうすれば原子エネルギーを平和目的に使うことができるかということは、この社會の構造そのものに依存する問題である。それだけではな

い。原子エネルギーの出現それ自體が、資本主義および社會主義という二つの社會體制の發展とその相互のからみ合いという歴史的な事實を離れてどうてい理解することのできないできごとである。原子物理學者は、ただひたすらに原子エネルギーのことばかり考えていると思つてゐるかもしれない。政治や經濟のことは自分にはわからないというかもしれない。しかしながら、政治や經濟の歴史的な發展をぬきにして、また今後の政治や經濟はいかにあるべきかという問題をぬきにして、原子物理學の現在と將來を理解することは不可能なのである。そしてすぐれた自然科学者たちは、パナールと同様に、このような社會的意識をもつようになってきている。

政策を行うためにはまず目的をたてなければならな

い。どのような目的が正當であるかという點について、まず科學的な吟味を行わなければならない。しかしこの點で人々の見方が對立する。もちろん政治の目的は主觀的なものであつてはならない。客觀的なものでなければならぬ。政策目的が客觀的であるためには、理論的な裏づけがなければならぬが、しかしその理論は歴史的なものの方の上にたつたものであることを要する。だから誰でもいうように、社會科學では理論も政策も歴史の裏づけの上にたつたものであり、歴史は理論と政策の媒介をする。この意味で歴史の研究こそ社會科學の門であるということもできよう。

このようにいうと、二つの科學の相違の面が不當に強調された感がある。私たちは共通の面のあることを忘れてはならない。社會現象は自然現象とちがって、すぐれて歴史的存在といったが、しかし社會現象も他面からみれば一つの自然現象である。というのは、個々人の生き方からみれば、社會の動き、歴史の流れというものは、あたかも自然現象のような巨大な壓力をもつて迫るからである。群集の流れのなかでは個々人の力がほとんど無

力に感ぜられる。時世の流れに逆らえば、英雄もまた殞落する。これは歴史と社會が超個人的な、一つの自然力として個人を支配することを物語るものである。

とくに近代社會の成立以來、このような社會における自然の力——いわば第二の自然——といったものの壓力が目立って加わってきた。これは近代社會のメカニズムがますます複雑となり、巨大となってきたためである。

民主主義であろうと、自由主義であろうと、資本主義であろうと、社會主義であろうと、この點では變りがない。したがって社會を一つのメカニズムとして研究し、そのメカニズムを支配する法則は何であるかという研究態度がなければ、今日の社會は決して科學的につかむことができないようになっていく。この點で社會科學は、別に自然科學と本質的にちがうところはないのである。

社會科學のうちで一番自然科學に近いのは、この點からいって經濟學であろう。今日の經濟生活は貨幣や價格を中心として展開される。利潤の追求ということも、貨幣經濟——價格經濟をまっけて初めて可能である。だから今日の經濟生活は數量生活である。社會的價値のうちで

社會科學的のものをみるというのはどういうことか

經濟價値ほど數量化されているものはほかにはない。そういうわけで、經濟學は社會諸科學のうちでもっとも科學性の高い學問だと考えられる。これに比べると政治學はまだ科學として押しも押されぬ體系を作り上げたかどうか、まだ問題があろう。法律學は技術的な部分が非常に多く、經驗科學としての體裁を確立するために苦しんでいるというのが現状であらう。社會學はその科學的性質がいろいろと論議されていて、まだその本性について一致した見解がない。教育學の科學性はさらに未確定であり、新興の科學である社會心理學についても同じことがいえる。人類學や考古學やその他の社會諸科學になれば、問題はますます不明確となるばかりである。こうしたことから、社會科學の大部分は今日依然として記述と分類の段階を出ないというパナールの批判が出てくるのも、まことにもっともである。

しかしながら、私たちはもう一度メダルを裏返して考えてみなければならぬ。なるほど數量化ということは科學の生命であらう。しかし數量化ということと精密化ということとは必ずしも同じでない。かりに政治現象が

數量化できないとしても、資本主義の發展につれて民主主義が支配階級の道具となり、一般大衆の抑壓の手段となる傾向があることは科學的な正確さをもって確認することができる。この場合正確な把握ということは數量的把握ということと同じではない。そのようになる必然の根據が把握できればそれでよいのである。また經濟學は數量的な科學となることができるといっても、それだけで經濟學の科學性が保證されるわけではない。というのは、經濟價値はなるほど數量的なものであろうが、すでに述べたように、貨幣とは何か、資本とは何かという根本問題について意見が分れている。このような問題の解決のしかたによって數量的な價値の取扱ひ方がまったくちがってくるのである。言葉をかえていえば、そこに研究者の見方、取上げ方、方法、態度といったものがふたたび頭をもたげてくる。つまり人間の問題が頭をもたげてくるのである。

社會科學はこのように複雑である。社會科學が複雑だということとは、その研究の對象である社會が複雑だということである。

もちろん自然もまた複雑であつて、社會科學より自然科學の方がむつかしいとかやさしいとか、簡單にいつてのけることはできない。これは前に述べておいた。しかし、自然科學では研究の對象が研究者の外にある。主體と客體が對立している。ところが社會科學では、研究の對象は外にあると同時に内にいる。研究者自體が社會の一部であると同時に、社會は外界の自然のように研究者に向つて對立する。これが社會科學の研究上一番むつかしい點である。私たちはまだ自身自身の立場というものを確立しなければならぬ。歴史と社會のなかで自分がどんな位置にあるかということを反省してみなければならぬ。しかしそのために自分のことばかり考えていたのでは何にもならない。自分を取巻く社會のメカニズムを知り、歴史の流れを見定めることをしなければならぬ。社會科學の研究には内と外の両面を、立體と客體の両面を、個人と社會の両面を統一的に取上げなければならぬ。社會科學的なもの見方は、この意味で、哲學的なもの見方と切つても切れない關係にあるといわなければならない。

## 四

最後にもう一ついっておきたいことがある。それは、社會科學的なもの見方にとっては、物事の關連性ということが非常にたいせつだということである。そしてとくに現代のような歴史の烈しい轉換の時期にはこの見方が一そう重要だということである。

物事の關連ということには、社會科學的にいってふた通りの意味がある。一つは社會事象の横の關連ということである。たとえば政治と經濟と教育の關連を考えると、いうことは、いまの私たちにとって絶対に必要なことである。その二は縦の關連である。つまり歴史的なつながりである。たとえば日本の現代は、少くとも明治維新以來一世紀にわたる日本社會の歴史的發展をぬきにしては理解されえないのである。

政治學は政治現象を、法學は法現象を、經濟學は經濟現象を、教育學は教育現象を、それぞれ分けて研究するということは、必要であるし、また正しい。専門化、特殊化ということは、すべて科學の發展のために必要不可

社會科學的のもののみをみるというのはどういうことか

缺である。しかしながら、現代社會科學の研究においては、この専門化に對して二つの反省が必要であると思ふ。

第一には、どのような専門も、いつも社會科學の共通の地盤に對する反省を缺いてはならないということである。私は最初に、どんな専門でもその鑛脈を掘り下げていけば、必ず共通の地下水につき當るといっておいたが、私たちは初めからこのことを意識してかからなければならぬ。社會科學の世界では、内と外、主體と客體の統一がなければならぬといふ述べた。このような自覺がないと、單なる専門家になり下ってしまつて、いつまでもたつても地下水につき當ることができない危険がある。自然科學ならばそれでよいかもしれない。しかし社會科學ではそれは許されない。それは自然と社會との大きな區別を見落してしまふからである。實際において、このようななじめな専門化の傾向は今日の社會科學研究家の間に強く現われているように思われるのであるが、それは社會科學から生氣と興味を奪うことになつてしまふ。今日經濟學などでもう一度人間の問題が取上げられてい

るのはこのためである。

第二には、社會科學の思想的性格ということである。

社會科學も科學である以上客觀的でなければならぬという主張は當然である。しかしながらここにもまた大きな問題が残されている。もし研究者の方法なり態度というものが無條件にきまつたものでないとすれば、研究者の思想態度をぬきにしてその研究を考えることはできないということにならう。思想とは生きることである。人間の社會における生き方の問題である。それは社會に對する人間の態度であるといつてもよいし、歴史に對する歴史と社會のなかでまともに生きようとしないう者である。このようにいうこともできるであらう。

思想はそのまま理論ではない。けれども思想のない理論は灰色である。それは實踐に役立つことはできない。私たちは何のために科學を勉強するのか、その意味がわからなくなってしまう。私は今日のような烈しい歴史の移り變りの時代には、とくに思想の問題が重要であると考える。それは理論を實踐に結びつける仲立ちをし

てくれる。それは科學者もまた生きた人間でなければならぬことを教えてくれるのである。

バナールの著作は、この意味で、單に初學者ばかりでなく、専門家にとつても教えるところが非常に多い。社會科學的なのもの見方とは何か。この書物は、初學者のために生き生きとこの點を手ほどきしてくれる。専門科學者の態度はいかにあるべきか。この書物は、専門家のために、この點を心いくまで説得してくれる。バナールの視野は廣く、科學者としての經驗は豊かで、その問題意識はもっとも現代的である。しかし彼は科學が歴史の産物であることを知っているし、逆に歴史における科學の役割を正しく評價することを忘れていない。彼の問題意識はもつとも現代的であるといつても、彼はそのため過去の不當に折りまげるようなことはしない。歴史における傳統の意義は決して軽く扱われていないのである。

私たちは、初學者も専門家も、この力作に接することによって、なぜ私たちは科學を勉強しなければならぬか、という科學以前の問題、このもっとも切實な問題に

對する明快な解答を見出すことができる。また、どうしたら私たちの科學を灰色の世界から生きた現實の社會のなかへ引上げることができるか、その方法をバナールから學ぶことができる。それは科學を歴史のなかにおいて

みるということである。バナールの一歴史における科學」は、やはり社會科學の母國イギリスの産である。大人の作品である。讀み終つて、私はとくにこの感を深くした。

(一橋大學教授)

社會科學的のものをみるといふのはどういふことか